

ヴォルフスフント
狼犬

ジークフリード・キルヒアイスが帝都^{オイデイン}へ帰還したのは帝国暦四九一年一月下旬。帝国暦が役割を果たし終え、新帝国暦に取って代わられるまであと一月弱を余すのみだった。

昨年末、間もなく大晦日を迎える日に共に同盟首都^{ハイネセ}を発ったラインハルトは、途中、帝国軍主力と共にフェザンでの戦勝祝賀会を開き、将兵たちに休暇を与えてその労を労っている。

「^{ジーク・カイザ}皇帝万歳!! ^{ジーク・ノイエライヒ}新帝国万歳!!」

ラインハルトの旗艦『ブリュンヒルト』が空港に降着するのを出迎えた帝国軍将兵は実に二〇万人を数え、その覇業を讃える声はフェザンの天地を揺るがした。この日、フェザンにしては珍しく細かな霧雨が空港一帯を覆っていたが、ラインハルトが『ブリュンヒルト』の舷門に姿を現すと、薄い雲を切り裂くようにして陽光がその姿を照らし出した。あたかも、兵たちの叫びによって雨粒が天に追い返され、雨雲をも追い払ったかのような神話的な光景だった。

侵攻直後、ラインハルトはフェザンに自治権を保証した、第二五代皇帝マンフレート一世の勅命を停止し、直接的な軍政下に置いた。ラインハルトの慧敏さは本質的に経済国家であるフェザンを長期にわたって軍政治下に置くことの非効率さを早々に察したことだった。前自治領主への背信と帝国への協力を約した二

クラス・ボルテック、前自治領主補佐官を臨時自治領主代行に据え、実質的に自治領主府の機能を回復させたのが、その一ヶ月後だった。ボルテックの補佐役としてはジークフリード・キルヒアイスを配したのは、軍隊の統制と作戦能力以外におけるキルヒアイスの能力を確認するのが目的だったことは事実である。リップシュタット内戦時、帝国辺境領域の平定と治績に実績を上げていたキルヒアイスだったが、今回もラインハルトの期待を裏切らなかった。

「威あるも脅ならず」

フェザン人の一人が評したように、フェザン人たちはキルヒアイスの存在を意識しつつも、その穏やかで融和的な統治を概ね好意を持って迎えていた。『神々の黄昏』作戦末期、キルヒアイスは代行者を残してバーミリオン宙域に発出したが、代行者もまたキルヒアイスの意を呈してその施政は概ね良好だった。

ラインハルトはキルヒアイスの手腕に満足したが、問題はキルヒアイスに代わってボルテックを『補佐』すべき人物だった。その後の歴史が示す通り、ラインハルトは近い将来にフェザンへの遷都を既定の方針として抱いていたが、この時点ではなお、フェザンは彼の代理人を統治者として必要としていた。

「ミュラー、卿に委ねよう」

それがラインハルトの結論だった。

「長いことではない。いずれ、フェザンは我が帝国の中枢となる。それまでしばらくの間、この地を卿に委ねる」

ラインハルトがミュラーに告げた言葉が、彼の遷都への意思を初めて言語の形に変えた瞬間だった。ラインハルト麾下の諸將は直ちに彼らの主君の意思を察し、その判断の正しさを思っ一斉に領

いた。

ミュラーの麾下には彼の艦隊がそのままフェザーン方面駐留艦隊として配置され、母港としてガイエスブルグ機動要塞がフェザーン回廊の同盟側出口に定置された。ガイエスブルグ周辺の旧同盟軍基地はJ-17を残してすべて破却された。J-17は、ガイエスブルグの前衛基地として補修され、高速艦艇を中心とした三〇〇隻規模の分艦隊が駐留する。ガンダルヴァ星系に駐留するシュタインメッツ艦隊の、万一の場合の緊急増援部隊だった。

「いずれ同盟領を完全併呑するとして、現帝都^{オデイン}ではいかにも遠く現在の帝国領に偏りすぎている。新帝国の首都たるに相応しいとすれば、現領土と新領土を結ぶこの地しかあるまい」

ラインハルトの判断を手放しに賞賛する僚友に対して、ロイエンタールは僅かに留保するところがあるようだった。

「そうかも知れんが……俺としては、玉座を据えるべき地は今しばらく帝都^{オデイン}であるべきではないかと思つが」

「なぜだ。何故、今しばらくなのだ？」

「一つにはここは黒狐のお膝元だ。黒狐もまだ捕縛されていない以上、やつが策を巡らしやすいこの地に玉座が置かれるのは不安の無しとはしない。第二には、ここはまだ同盟に近すぎる。フェザーン回廊を抜ければ、一月とかからずに同盟首都を直撃できるし、それを食い止める軍事力はもはや同盟には残っていない。怯えた鼠に更に威圧を加えるのは、徒に窮鼠の大群を生み出す結果にならないか……」

「統帥本部総長閣下は心配性だな」

ミッターマイヤーは笑い、極く近い未来に彼の親友に冠せられ

ることが決まっているその肩書きを、半ば揶揄の言葉として放った。金銀妖瞳^{ヘテロクロミア}の美丈夫もまた、微笑とも苦笑ともつかぬ笑いに頬を動かした。

「あらゆる局面を想定するのが軍令を預かる者の務めだと俺は思っている」

「否定はしない。だが、黒狐のことはともかく、我が帝都^{オデイン}がフェザーンに遷った結果として同盟の連中が直ちに何か騒ぎ出したとしても、何ができるというのだ。今のところ、彼らは敗戦のショックで茫然自失というところだろう。いずれ何かあるとしても、まだ先のことだ。それまでには新帝国の基礎も固まるだろうし、黒狐も息の根を止められているだろう」

「艦隊司令長官閣下は楽天的で良い」

先ほどのお返しと言わんばかりにロイエンタールが笑った。実際、彼らは口にするほどには遷都に対しての不安を抱いていたわけではなかったのである。彼らもまた、ヤン・ウェンリー同様、両国の関係が急速に安定を欠き始めるまで数年の猶予があるものと、漠然と信じていた。一つには、『神々の黄昏』作戦末期のパーミリオン会戦の犠牲が巨大すぎ、さしも戦いに馴れた彼らですら、いましばらくは大量の流血への忌避が強すぎたのだとも言えよう。

「帝国政府は、帝国及びフェザーンの金融機関による同盟国債の保有を禁止しない。また、バラートの和約に基づき同盟政府より支払いを受ける毎年一兆五〇〇〇億帝国マルクの安全保障税を加えて、我が国の金融機関が保有する同盟国債に対する信用保証を行う基

金を設立する」

バーラトの和約締結と同時に帝国財務省から出された通達である。

この通達を目にした金融機関の首脳たちは一様に安堵の胸をなで下ろした。彼らは真剣に帝国による『同盟国債の破棄』を案じており、そつでなくとも同盟政府による、敗戦に伴う同盟国債の債務不履行を恐れていた。この通達は、少なくとも彼らの不安が杞憂となったことを示していたのだ。

問題はその後だった。

「基金によって保証を与えられるのは、帝国暦八〇〇年一月一日時点で保有されている同盟国債に限定する。すなわち、同日以降の新規購入分の同盟国債については、借り換えを除き、いかなる保証も与えないものとする。また借り換えに伴う購入については、帝国政府への申請と許可を要するものとする」

事実上、同盟国債の新規購入を禁止した通達であり、通達を受けた側は当然の制限としてこれを受け取った。

フェザーンの占有により、帝国は旧門閥貴族の私有財産のほぼすべての接収に成功している。この結果として、帝国の財政は劇的な改善を見たが、その一方で、同盟に較べて著しく遅れている国内のインフラストラクチャの整備・拡張、さらには新たなフロンティア開拓にむけて膨大な投資が見込まれている。このために市場に流し込まれる巨大な現金が同盟の国債購入などに充てられ、その結果、同盟の衰亡で紙切れにかわってしまつようなことがあれば、帝国政府としては何をやっているか分からなくなってしまう。帝国としては、同盟の最終的消滅は既定路線である。同盟を完全滅亡させない

のは極く一時的な方針でしかないのだから、これは当然の通達だった。購入したければ、帝国の国債を買い込めば良いのである。

バーラトの和約のどこにも書いていない、この帝国政府による施策は、しかし、同盟政府の咽喉元を急速に締め上げる、意外な実効的効果を発揮することになる。

「これは、バーラトの和約のどの条項よりも強烈だねえ」

通達を目にしたホワン・ルイはさすがに青ざめて天を仰いだ。

通達自体は同盟政府にも同盟の金融機関にも正式には通知されていない。彼が通達を手に来たのも、財政に関して関係のあったフェザーンの商人からの連絡によってだった。

「これじゃ、新しい投資も何もできなくなってしまうつてだけでなく、借金もまともには返せなくなるといふことだねえ。既得権を持つる連中は自分たちの権益を手放さないだろうし、金のない星区はもう同盟政府から資金を出して貰う道もこれで断たれてしまつわけだから……」

ため息をつきつつ、ホワン・ルイは政府の官庁街へとつま先を向けた。通達について年来の親友であったレベロと話し合うためでは、残念ながらなかった。情報を入手して直ぐ、レベロには連絡を取ったのだが、多忙を理由に面会を断られたのだ。正統政府関係者への事情聴取の件で多忙を極めていて、帝国の金融の話に耳を傾けている暇はない、と。

だから、彼が向かう先は最高評議会の建物ではなく、司法委員会のビルだった。数日前通知されてきた、『銀河帝国正統政府樹立の諸事情に関する事情聴取への出頭依頼』。文面を前に、さすがのルイも友人が完全に誤った方向へ盲進している事実を認めずには

いられなかった。

この一片の通達のこととは措くとして、ラインハルトは、ナイトハルト・ミューラー上級大將にボルテック自治領主代行への補佐役を命じる辞令とともに、バーミリオン会戦で旗艦『リューベック』を喪った彼に新たな旗艦『パーツイバル』を与えることを約した。帝都造兵廠で建造中の『パーツイバル』は現在艤装中であり、ラインハルト戴冠後、最初に就役する旗艦型戦艦となるはずだった。主君からの恩寵にミューラーが頬を紅潮させて感激と感謝の意を表したことは言うまでもない。

ラインハルトがそうしてフェザーン平定のための様々な作業を行っている間に、キルヒアイスは一步先に帝都^{オースティン}へ向かったのである。

「戴冠などと言っても大げさにやる必要はない」

『ブリュンヒルト』の執務室でラインハルトは戴冠の儀式が極く簡素に行われるべきとする、彼の意思をキルヒアイスに伝えた。「エルウィン・ヨーゼフ二世は退位させる。幸い、退位の署名ができる程度には精神的には安定してきているようだ。退位させ、公爵位と体面を保つには十分な程度の年金を与える」

「名は、どうします？」

「ゴルデンバウムの名をそのまま名乗らせるのか、というキルヒアイスにラインハルトは、少なくともキルヒアイスの予想を裏切ったことには頷いて見せたのだ。「名前を変えさせることは考えた」

「で……あれば……」

「名を変えたいなら、自分の意志で変えれば良い。すくなくともわたしは、ゴルデンバウムの名をわたしの命令で変えさせてやるような温情を与えるつもりはない」

「温情……ですか？」

「考えてみる、キルヒアイス。奴らのやってきたことを。ルドルフに痴愚帝に流血帝、いやフリードリヒ四世だけでも十分だ。奴らのやってきたことを、ずっとゴルデンバウムの名と一緒に背負っていつて貰う。それが、ゴルデンバウムの末裔に産まれた以上、あの子供が背負わねばならないことだ」

「分かりました。それで治療は、続けるのですか？」

「続ける。これも温情ではない。分かるな？」

「分かります」

異常に肥大した自我と暴力にのみしか表現できない自己の表出。エルウィン・ヨーゼフ二世が背負い込んでいる、そつした精神的な不安定の治療は、間もなく廃帝となるこの少年への救いとなると同時に、ラインハルトの言う、ゴルデンバウムの名に纏わり付く一切の負債が新たな精神の負荷としてのしかかることを意味する。取りよつては残酷極まりない措置と言えた。健康な精神活動と引き替えに、過去五〇〇年間に渡る父祖の負の遺産全てに伴つ周囲からの白眼視を受け止めなければならなくなるのだから。

「それで駄目になるよつであれば、それまでのことだ」

やや吐き捨てるに近い、苦さを帯びた口調だった。